



Title	D. H. ロレンス研究 : 長編小説の構造と文体
Author(s)	森, 晴秀
Citation	大阪大学, 1978, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/32331
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 ＜a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed >大阪大学の博士論文について をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【 4 】

氏 名・(本籍)	森 ^{もり} 晴 ^{はる} 秀 ^{ひで}
学 位 の 種 類	文 学 博 士
学 位 記 番 号	第 4 4 3 7 号
学位授与の日付	昭 和 53 年 12 月 19 日
学位授与の要件	学位規則第 5 条第 2 項該当
学 位 論 文 題 目	D. H. ロレンス研究

——長編小説の構造と文体——

論文審査委員	(主査) 教 授 山川 鴻三
	(副査) 教 授 毛利 可信 助教授 藤井 治彦

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、ロレンスのヴィジョンを論じた序論（第1章）、ロレンスの文体についてその一般的な特色を論じた総論（第2章）と、9編のロレンスの長編小説についてその文体の推移をその構造と結びつけながら論じた各論（第3章—第10章）、それにロレンスの二編の劇と一編の未完の小説についてその喜劇的文脈を論じた最後の章（第11章）とから成っており、総頁547頁（A5判）に及ぶ大部なものである。

第1章 序論 ——ヴィジョンを求めて。ロレンスが人間と生きた宇宙との連繋の回復というヴィジョンを求めて奮闘したことを説き、そのヴィジョンが天上に向かう上昇のパターンと地下に向かう下降のパターンを取ることを明らかにする。そしてその下降のパターンを同時代の三人の小説家A・ハクスリー、V. ウルフ、E. M. フォースターのそれと比較し、ロレンスの生命力の象徴としての「暗黒」や「地下界」のイメージが、ハクスリーの現象の死と永遠の生を結びつける「波」のイメージや、ウルフの死の意識と永遠の発見に繋がる「クサビ型をした暗闇」のイメージ、とりわけ、フォースターの、すべてのものがそこから生まれた無意識の世界、すべてが帰ってゆく暗闇としての「洞窟」のイメージに通じることを強調する。

第2章 ロレンスの文体及びその発生と確立。現代における文体研究の大勢を概観したのち、独自の方法にしたがって、ロレンスの文体をウルフやハクスリーのそれと比較し、彼らの場合はエッセイと小説の場合で異なるのに反して、ロレンスの場合は両方の場合とも同じであるとし、その特色を“loose”と名づけている。つぎにロレンスの文体が、印象派の画家たちの描く輪郭、並置法、素材、光の用い方等から影響を受けている点を指摘したのち、ロレンスの発想の構造が並置法的であるため

に、語句やイメージが微妙な変化を伴って反復されるという形を取り、その結果、文章がリズムを帯びることを説く。さらに視点の操作に関して、作者の介入が作品の統一を乱す事実を挙げ、この視点の混同、人物設定の混乱が文体上の混乱として現われる事実を明らかにする。最後に言語のレベルの問題について、E. カシラーの説に基づいて M. スピルカが区別した「言語の高い方の層」と「言語の低い方の層」、すなわち静的で超時間的なキリスト教的無限と原始的な超自然的な力とが、ロレンスにおいては決して個別的に存在するものではなく、それぞれが依存し合う関係にある時、その表現には最も強い生命が与えられるものだ」と主張する。

第3章 The White Peacock. この小説を一方的に「未熟な」作品として不当に過小評価する諸家の意見に対して、この作品を正当に評価する必要を説き、これを長短両面から考察しようとする。まず視点の操作に関して、視点の不統一のために作者と語り手シリルが混同されていることを遺憾としながら、又一方、例えばこの小説における“intruder”の認識が次作 The Trespasser の主要なテーマと直接連なるように、ここには将来の思想と表現を指向する多くの素材が見いだされる事実を浮き彫りにする。又文体的に見るならば、ここには文体以前の稚拙な修辞があるとともに、将来の文体上の特色を予見せしめるに足る各種の萌芽が豊富にあることを、修辞的表現や、大地、花、動物のイメージ等多くの場合について詳細かつ丹念に検討する。

第4章 The Trespasser. この小説にも視点の操作の不備、又低次元の感傷趣味を払拭出来ずにいるという欠点があるにもかかわらず、この小説がテーマの上で前作から始まり次作の Sons and Loversに至るロレンスの思想遍歴の中で主張すべき位置を占めていることを論じ、又言語の質においては次作の Sons and Loversに繋がるが、文体的には極めて生命的、かつ堅実であり、むしろ Sons and Loversを飛び越えて第4作 The Rainbowを直接指向することを、前章同様、修辞的表現や各種のイメジャリーについて詳しく論証する。

第5章 Sons and Lovers. この小説の前半部における、余剰な表現を払拭した、冷静かつ透明でありながら作家独自の新鮮な感性を余す所なく伝える写実的文体と、後半部における、Women in LoveやThe Plumed Serpentに見られる予言的世界をすでに瞥見せしめるような思想と言語との間に次第に断層が目立ち始めることを指摘し、主人公ポールと両親の夫婦としての関係、ポールと恋人ミリアムとの関係、そしてポールともうひとりの恋人クレアラとの関係について、いちいちこの点を詳細に考察したのち、これらの関係が破局を迎えるのは、このような写実と神秘という二つの全く異質の文脈の断層によって生じる矛盾と曖昧さを払拭し、両者を和解せしめるべき方策をポールが知らなかったという事実によるものであることを明快に論証する。さらに、この小説に見られる挿話の多用、頻繁な視点の転換、及び人物間の相互批判、話題の転換や逸脱等の現象について詳細に例証し、例えば人物間の相互批判が音楽におけるフーガ形式とも称すべき形をとること、又話題の転換や逸脱について、それが成功した場合には、ひとつの話題なり挿話なりがそれが現われる部分的な場所においては前後の文脈から断ち切られた断片的な話でありながら、作品全体として見る時、当初は短かい不協和音として感じられたものが変化を伴って繰り返される中に、いつしか協和音に転じ、それが次章では主旋律となって文脈の表面に現われること等、興味深い音楽の比喩を用いながら巧妙に論証す

る。

第6章 The Rainbow. この小説が3代にわたる男女の生活を基礎とし、それぞれの人物の成長過程を辿るという意味において教養小説としての一面を持つものでありながら、その作品の構成が単にストーリーの発展にではなくイメージの展開に基礎をおく点において、単なる教養小説とは異なることを指摘したうえ、3代の男女の関係について詳細に論じてゆく。まず、1代目、トムとリディアについては、トムとの出会い前後のリディアを描く「花」の場面において始まった彼女の再生と、暗い神秘性を兼ねるに至る彼女に対するトムの関わり方を辿る文脈は、その後一貫して夫婦の関係の描写へと繋がること、又彼らの到達した境地を描く「虹」のヴィジョンが巻末においてアーシュラの前に現われる「虹」へと発展してゆくことを指摘する。つづいて、2代目、ウィリアムとアナについて、「鷹」のイメージが暗闇と洪水のイメージに転じる過程を観察したのち、「月」、「アーチ」のイメージが次代において完成される先駆的な意味をもつことを考察する。そして最後に、3代目、アーシュラとスクレベンスキーについて、まずスクレベンスキーとアーシュラがそれぞれほぼ一貫して「動物」と「花」のイメージによって描かれることを指摘したのち、動物、暗闇、洪水という前代同様のパターンが変化を伴って反復されること、及び「月」が暗闇とともに光としての役割を演じて光一闇一光というパターンが確立し、このパターンが繰り返し現われることを説き、そして巻末の「虹」のイメージは光、花等、この小説に現われたイメージのすべてをまとめるものであると結論する。

第7章 Women in Love. この小説ではイメージの意味が最初から規定されていて、イメージがもはや展開する象徴ではなく装飾的な比喩になっていること、即ち作品の主題が先ず「ことば」によって提示されていることを指摘し、ここでは洪水の次には「虹」は現われず、専ら「崩壊の暗い河」、「腐敗の黒い河」が作品を覆っていると説く。作者が否定的に描いたジェラルドとその恋人グドルンの場合には言うまでもなく、作者が肯定的に描いたパーキンと恋人アーシュラの場合も、作者がときには彼らについてイマジスティックな十分に成熟した文章を書くことがあるとしても、一般にはイマジスティックな文章よりもディスカーシヴな文章で書かれていて、彼らの目指す蘇生が極めて困難であることを暗示していると述べる。そしてときに「花」、「朝日」、「鳥」等のイメージによって前作The Rainbowのアーシュラが甦ってくることもあるとしても、結局この小説の一般的な調子は、最後の登場人物レルケの「暗黒の矮小で卑猥な怪物」、「腐敗の河に住むねずみ」というイメージの表わす世界であると断定する。

第8章 Aaron's Rod; Kangaroo. この二作はほぼ前作Women in Loveのテーマの繰り返しで、新鮮味に乏しく、作者の想像力が最も弛緩した時代の作品であると断ずる。そして、部分的な情景描写を除き、作者の思想、構成、人物設定、作者の位置、イメージリーの用い方、ひいては文体そのものにも疑点が少なくないとして、この両作を容赦なく批判する。

第9章 The Plumed Serpent. この小説では、前の諸作から発展した「星」、「樹」のイメージとともに表題の「翼ある蛇」等のイメージがThe Rainbowのイメージのように変化しながら展開することを認めながら、女主人公ケイトがロレンスの描いた幾多の人物の中でも最も精彩に富んだ人物であるにもかかわらず、ラモンやシブリアーノのような人物に作者の介入の過剰による性格上の重大

な欠陥があり、又技法的にアンティ・クライマックスと作品の不統一があって、この作品を「最も重要なもの」とする、作者自身の主張を受け入れ難いものとする。

第10章 Lady Chatterley's Lover. 作者が幾多の挿話や文体の使用経験を経て、この小説では最もよく整理された筋と最も透明な文体を持つに至ったことを説き、作者がここに醒めた文明批評家として再生したことを力強く説いて、この最後の小説論を明快に締め括る。

第11章 失われた文脈——ロレンスにおける喜劇性。二編の劇作品 The Married Man と The Merry-Go-Round から未完の小説 Mr. Noon に至る作品に表われ、それ以後失われることになる作者のヒューマー、作者の今ひとつの文体的特色である喜劇的文脈を考察し、これを付説として加える。

論文の審査結果の要旨

本論文は主として The White Peacock から Lady Chatterley's Lover に至るロレンスの9編の長編小説について、視点の問題等を媒介として小説の文体を人物設定、プロット等小説の構造と密接に結びつけながら、ロレンスの文体の発生と変遷を辿った着実な実証的研究である。これまでロレンスの研究は、性と愛の哲学、反文明思想等、ロレンスの思想の研究に集中されがちで、ロレンスの文体への断片的な言及はあったが、それについてのまとまった研究はなかった。本論文はロレンスの文体の本格的な研究を目指した最初の企てといつてよく、その意味で本論文の持つ意義は大きい。ここに取り上げられた各作品の解釈は、深いテキストの読みと該博な書誌的知識に裏打ちされており、創意に富み、説得力に満ちている。中でも、二人の人物間の文体上の相違が両者間の破局を引き起こすとする Sons and Lovers 論と、イメージラリーが変化を伴って展開する過程を詳細に考察する The Rainbow 論は、その意味で圧巻である。

しかし本論文にも疑点がないわけではない。まず第一に問題の扱い方にむらがあることである。初期の作品 The White Peacock と The Trespasser は未熟な作品であるにもかかわらず、後の作品への文体的萌芽を含むがゆえにやや過大な扱いを受けているのに反して、Women in Love 以後の作品はいずれも成熟期の作品であり、殊に Women in Love は Sons and Lovers や The Rainbow と並ぶ傑作であるにもかかわらず、文体上の発展を示さないという理由で過小評価され不当に粗略に扱われている。又個々の小説論の場合も同様で、例えば Sons and Lovers において、先に出てくるポールとミリアムの挿話の叙述に比べて、後の方のポールとクレアラのそれが不当に簡略であるのも、同じ文体上の理由によるものであろう。さらに、文体論という学問の性質上、細かいイメージや文脈等に注意を集中する結果、作品全体に十分目が届かないということである。つまり、上にも触れたように、作品の評価に往々誤算があるということである。しかしながら、これはむしろ未だ発展途上にある文体論そのものによるものであって、本論文の先駆的研究としての価値は高く評価されなければならないであろう。

以上の観点から本論文は文学博士の学位を授与するに十分適格であることを認定する次第である。